

# 林又七「クルス透かし」鐸

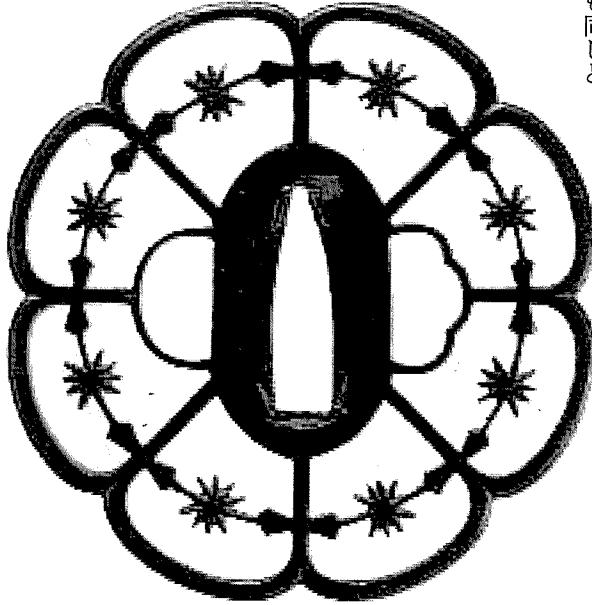
## —「十字架とベツレヘムの星」—

伊藤三平

### 1. 林又七の「クルス透かし」鐸

この鐸は無銘だが『林・神吉』(伊藤満著)に林又七の作品として紹介されている。

写真でわかるように八つ花形に造形して、各仕切りに十字架(クルス)を模した形を入れ、十字架の横棒は八つ花を結ぶ内輪につなげている。そして内輪の真ん中に上下各4つの突起が出た円の紋様を『林・神吉』の解説では「イエズス会の紋章である「IHS」の回りにある光を象徴する透かし」と記している。一理あるが、上下合わせて8つの突起に注目すると、「八芒星(ベツレヘムの星)」ではなかろうか。イエズス会から遅れて1600年頃から日本で布教した団体にフランシスコ会、ドミニコ会などがあるが、ドミニコ会の紋章上部にも見られるものである。



林又七「クルス透かし」鐸 (『林・神吉』伊藤満著)

### 2. キリスト教関連の何の図柄か



イエズス会の紋章  
(ウィキペディアより)



ドミニコ会の紋章  
(ウィキペディアより)

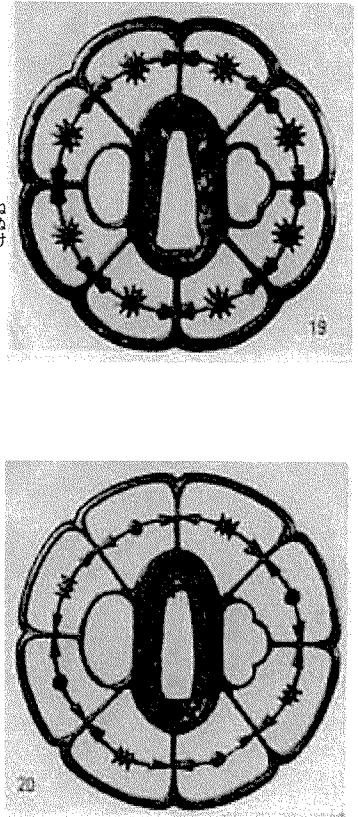
### 3. 古作にもある図柄

「八芒星(ベツレヘムの星)」は、キリストがベツレヘムで誕生した直後に、東の国において西の空に出現したという星のことである。これを見た東方の三博士は、ユダヤ人の王が生まれたことを知り、その星に向かって旅を始めたとの伝説がある。聖母マリアの象徴とされている。

この図柄は又七の独創ではない。『鐸集成』(中村鉄青著)に、同種の図柄の鐸が2枚掲載されていて、図の名称は「玉簾」としている。

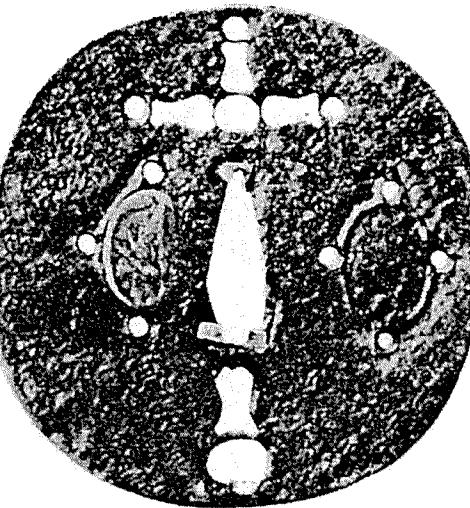
#### 4. 信家にもあるキリスト教関連の図柄

このようにキリスト教関連の図柄が、別の名前で伝来しているのは信家譚でも見られる。「信家の新研究」（勝矢俊一著）『信家譚 付・中村覚太夫信家譚集』に所載）には3枚のキリスト教関連の信家譚が所載されているが、左図は尾張藩の重臣石河家に「十戒図」として伝來した信家で、十字架の透かしと、楕円形のメダイ（聖牌、メダルのことでネットクロスなどに付けられた人物マリアやキリストなどが彫られることが多い）の図である。

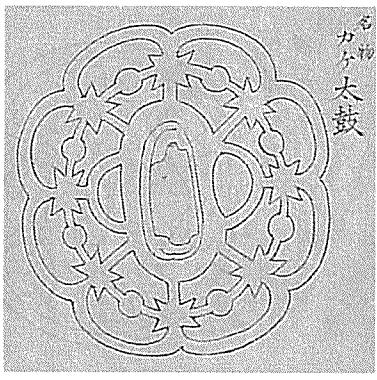
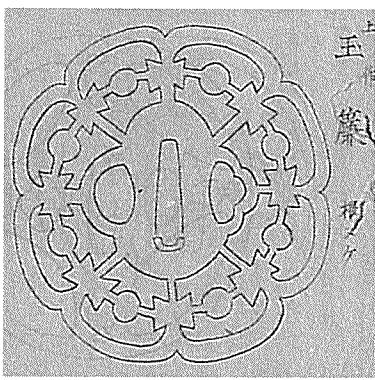


右下の譚には「根抜鍔」（ねぬけ）、「時代の古い尾張と見られる」とある。「根抜け」とは「陶磁器で、同系統の窯中の最古製。茶器では瀬戸窯中の最古のもとの、また、建武から文明年間に製した古唐津の最も古い碗を指した呼び名。ぬぬき」（『広辞苑 第五版』）とあり、古い時代のものの総称であり、昔は刀装具の世界でも古い鍔の分類に使われていたのである。

また同書の解説には「刀盤図譜」所載とあり、これは松宮觀山著の『刀盤賞鑒口訣』の中の「刀盤図鑑」のことであろうと推測して、確認していくと、左図上の「上作 玉簾 根ヌケ」と左図下の「名物 カケ太鼓」が所載されている。ただし、図には小異がある。



石河家伝来 信家  
(勝矢氏論文より)



伝島原城信徒遺物メダイ  
16世紀後半～17世紀前半  
神戸市立博物館蔵  
(文化遺産オンラインの  
ページより)



## 5・安土桃山時代のキリスト教の広がりと弾圧の歴史

ザビエルが天文18（1549）年に来日して以来、キリスト教は広まるが、豊臣秀吉は天正5（1587）年にバテレン追放令を發布し、宣教師達の退去を宣告、教会を破壊させ、イエズス会領となっていた長崎・茂木・浦上を没収した。慶長元（1597）年には長崎で「日本二十六聖人殉教」と言われる処刑がある。

徳川家康は南蛮貿易を重要視し、キリストン禁制に積極的ではなかつたが、「岡本大八事件」で家康の旗本にもキリストンが多いことを問題視して、慶長17年（1612）天領に、2年後には全国に禁教令を出す。幕府の禁教令の背景に、西洋との貿易はプロテスタント国（商売と宗教を結び付けてない）のオランダ、イギリスでも可能と判断したこともあると考えられる。

全国に禁教令が出されたが、江戸時代の幕藩体制は、幕府の統治権と同時に大名の自領統治権が認められており、藩によっては弾圧の程度は異なつていた。

「大坂冬・夏の陣」（1614～1615）では大坂方に明石金登（あかしよねのり）をはじめ、多くのキリストン信徒が参戦している。

元和8（1622）年、最も多くの信徒が同時に処刑された「元和の大殉教」が起こり、幕府の弾圧はさらに激しさを増していき、寛永14（1637）年に「島原の乱」が勃発する。その後も秘かに信仰を続けていた信者達があり、明暦3（1657）年には「郡崩れ」（大村市北部の郡川周辺の町々で608名のキリストンが斬首、水牢などで殉教）と呼ばれる弾圧事件もあった。

江戸時代初期はキリスト教信者が30～40万人程度いたとされる。総人口が1200万人程度の時代（『日本経済史1 経済社会の成立』）であり、総人口の2・5～3・3%にある。明治以降、現代に至るまで、日本ではキリスト教信徒数は人口比で1%を越えたことはなく、禁教以前のキリスト教の存在感は高かつたと言える。

## 6・林又八の生涯と禁教令

この譚は信仰とは無縁に又七が古作を写しただけという可能性もあるが、キリストン信者からの注文と考えると、禁教令との関係が重要であり、又七の生年が鍵となる。生年には次の諸説がある。『肥後金工録』（長屋重名著）の慶長18（1613）年説（A説）、『肥後譚工人名調』（八代西垣四郎作著）の慶長13（1608）年説（B説）、『金工譚寄綴』（田中一賀斎著）の慶長10（1605）年説（C説）である（以上の各説は『肥後金工大鑑』より）。

細川藩はガラシャ夫人（1600年没）が厚くキリスト教を信仰していたが、慶長19（1614）年以降の幕府による禁教令は当然に遵守し、島原の乱では一揆討伐に力を發揮している。島原の乱終了時（1638）の又七の年齢はA説だと26歳、B説だと31歳、C説だと34歳となる。

この譚がキリストン信仰を持つ武士の注文であれば、遅くとも島原の乱いで目立つために、削り取つたのであろう。

この後、又七はこの図から十字架とベツレヘムの星を削除した名作を発表している。

『神吉譚絵本』には小異があるが同様の図を「唐太鼓図」（『刀盤賞鑑口訣』での名称を参考にして掲載しており、後代の林家・神吉家に引き継がれている。

林又七（『透し譚』小窪、笛野、益本、柴田共著）

